



JUDInews 四国

発行日 1999年3月15日 編集・発行人 白石高啓 編集長 大西泰弘
発行所 都市環境デザイン会議 四国ブロック JUDInews編集事務局
〒760-0050 高松市亀井町8-12 MO環境設計内
電話 087-831-8662
FAX 087-831-8663



第2回 四国風土再発見環境デザイン紀行 in上勝

「地域フォーラム 棚田の景とアフォーダンス」

が開催されました

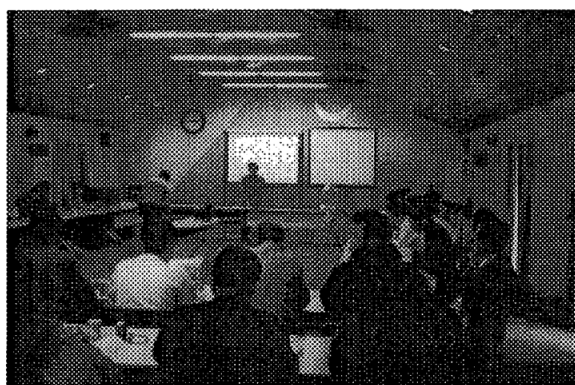
JUDI 四国ブロック幹事 白石 高啓

1月30日(土)～31日(日)、徳島県上勝町にて地域フォーラム「棚田の景とアフォーダンス」が開催され、約50名の参加がありました。

＜上勝穴禅定(2億6000万年前に形成された鍾乳洞)でアフォーダンス体験＞

徳島県勝浦郡上勝町での第2回四国の風土再発見*環境デザイン紀行は棚田から環境を見つめJUDI会員澤田俊明氏の博士学位レポートの難解な澤田式アフォーダンス理論を解明することによって、四国の風土に肉薄出来ることに密かな期待をしていたが、澤田氏のインフルエンザ*ドタキャンによって残念な結果とはなかった。しかし棚田のウォッチングで解説された「棚田を考える会の会長」谷崎勝祥氏、基調講演を快諾して頂いた東京農工大教授千賀裕太郎先生、昨年発足した活動的な勝浦側流域ネットワークの経過報告と意気込みを述べた初初しい田中由宇子さんらによって予定の270分は短く感じた。

特にこれからの環境デザイン*まちづくりには千賀裕太郎先生が語られたグランドワーク(1980年代にイギリスの農村地域で始まった住民・行政・企業の3者がパートナーシップを組み、地域環境を創造してゆく新しい地域づくりのための、新たなネットワークづくり)は重要な要素で、又地域の誇りを復活させる原点のような気がした。日本にも(財)日本グランドワーク協会が1995年に発足し、ここ徳島県でも熱心に取り組み、県庁関係者も当日参加されていた。先生が直接指導された、滋賀県甲良町(JUDI NEWS035に掲載)の報告は1991年開設の



▲フォーラムでの基調講演

「せせらぎ夢現塾」勉強会によって住民が自らの意思で学習を深め、積極的な意見で多くの人のアイデアを引き出し甲良町独自の景観がせせらぎを生かした形で実現していった。その際、如何に専門家の真摯な参加が如何に重要かが強調された。JUDIの存在意義もこのあたりなのだろうか…

「グランドワーク4つのポイント」として千賀先生は次のようにまとめられた。

- ①環境改善を目的とした地域を良くする活動
- ②ボランティアの参加を得て実際に汗を流す活動(電子レンジ効果=分子運動の如く一人一人が熱くなるの意)
- ③住民・行政・企業を含む多くの地域主体の参加
- ④専門能力を持つスタッフの参加

個人的には上勝町は初めて訪れたが(財)愛媛県まちづくり総合センターとの交流もあり親しみやすく、懐かしい環境との出会いとなった。しかもここには人々の豊かな表情によって癒されるほっとしたものが溢れている。フォーラ

ム の翌日JUDI会員林 氏に誘われて他4名と慈眼寺の穴禅定胎内くぐりを体験。各自1本の蠟燭の灯りを頼りに究極の狭い洞窟に潜入、林氏の分かりやすい指示で、身体をくねらせながらの行動はいつしか無我の境地に導かれる状況なので正確な距離感は果たして何mか定かでない。「これぞまさに環境が動物に提供する価値＝アフォーダンスなのだ」と身をもって実感できた貴重な上勝風土再発見だった。



▲穴禅定入口

上勝町・冬の棚田から

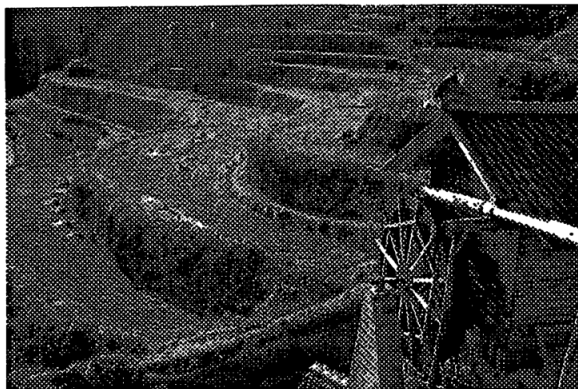
鳴門教育大学 美術講座デザイン研究室 松島正矩

東京から単身赴任で鳴門の地に来て6年近くになろうとしているのに、四国のことがまだ何も解っていない。JUDIの活動になるべく参加して、郷土を愛する皆さんと交流しようと考えているのではあるが、いつもスケジュールが合わず、今回の上勝への参加は池田フォーラム以来となってしまった。

上勝町は徳島市の中心部から車で40分くらい勝浦川沿いをさかのぼった山間地に在る。日陰には雪の見られる1月の末、「上勝町棚田を考える会」の谷崎勝祥さんに案内していただき3カ所の棚田を見学した。もし雪が積もっていたら、怖くてとても行く気にならないような山間地に棚田は点在していた。各地の棚田の規模は決して大きくはないが、石を積んで造られた小さな田が、文字通り棚のように急斜面に展開し、そのリズムカルな連続が心地よく感じられた。残念なことに、耕作を放棄した田が一部に見られたり、棚田が休んでいる冬枯れの季節であったため、景観の美しさは半減していたようである。ぜひ、生き生きと稲の育っている時期に訪れた

いものである。どういうわけか、案内していただいた場所だけでも2カ所に、新しく造られた水車小屋が見られた。これは実益を上げるためではなく、棚田を訪れる人の郷愁を誘い、これを造った農家の人々の団結力を高めることに役立ったに違いない。このような地域を元気にする仕掛けを農家の人々は探しているようである。

棚田は、山や丘の傾斜地に棚のように造られた田のことで、数が多いことから千枚田とも呼ばれ、全国各地に見られる。棚田が心地よいリズムで美しく連続するのは、大型機械で強引に整地したものではなく、自然の起伏を活かしながら山肌に沿って、人の力で営々と築いたものだからである。また、郷愁を誘うその景観が自然に溶け込んでいるのは、人工的な材料を排しているからである。山肌を削り、出現した石で石垣を造り、篩い分けた土を次第に肥やして田土に変えたそうである。山里の人々の知恵と工夫が感じられ、まさに、棚田は先人の血と汗の結晶であるといえよう。この棚田、石積みであるから永遠に存続すると考えるのは大間違い



▲棚田と水車小屋



▲谷崎さんの案内で棚田見学

で、家や車と同じように、田として機能していないと、たちどころに荒れてしまい維持が難しいそうである。

ところで、経済的行為として見た場合、棚田における稲作はとて成り立たない状況にあり、存続の危機を迎えているようだ。見学した日の夜、月ヶ谷温泉で開かれた交流会では、地元の人々の悩みを直に聞くことができた。自分なりの見解も加えると、問題点は次のようになる。

- コメの大量在庫と価格の低迷
- 農水省の減反政策による生産調整
- 後継者不足と過疎化
- 人手不足と高齢化
- 傾斜地であるための機械化の難しさ
- 山間地であるための水源確保の難しさ
- 地滑りによる石垣の自然崩壊

このように棚田をめぐる環境は年々厳しくなっており、全国の農家が共通に直面している問題だけでなく、山間地特有の悩みが加わり深刻さが増大している。現在、最も深刻に捉えられているのは、やはり若者が農業から離れていくという後継者問題にあるようだ。一つの解決策として、都市周辺部では、賛同する人に田畑のオーナーとなってもらい、財政的な負担を負っ

てもらおうと同時に、農業に対する理解を深めてもらおうという「オーナー制度」も見られるが、山間地ではそれも難しそうである。また、ミカンを植えても杉を植えても休田の解決策とはなるが、棚田を守ることにはならない。あくまでも棚田は水を蓄えることのできる田んぼでなければならない。

山間地の農家の人々にとって、棚田は地域文化の拠り所であり、今日の危機的状況を少しでも改善するために真剣に解決策を探している。単に棚田の景観保全という観点からだけでなく、農業の活性化という意識を持ってこの問題に取り組むことが必要であるようだ。



▲上勝町の棚田

棚田について思ったこと

平野地域計画 平野祐一

阪神淡路大震災が起こり、我々が不安定な大地の上で生活している事を実感したのですが、今回、棚田の見学会に参加して、その事をあらためて感じさせられました。

【地滑りと共に暮らす人々】

檜原の棚田等を見学し、上勝町棚田を守る会会長の谷崎さんのお話を聞いていると、どうも棚田は生き物のように動いている。水平な耕作面が次第に傾いてきて整地し直さなければならなかったり、法面がはらんできて石を外しては又積み直したり、あるいは豪雨時に棚田全体が崩れてしまったりなど。民家の地盤が数年間で2m程度下がったという話も聞きました。棚田と共に暮らす人々にとっては地面が動くというのは日常の事のように見えました。棚田自体、地滑り地帯に発達したものだそうです。水流が耕作に必要なのを考えますと谷筋に棚田が発達する

のはうなづけます。もう少し踏み込んで考えると、棚田はその起源としては地滑りが起こった部分を改修しつつ形成されたのではないかとも思えてきます。地滑り部分は何らかの形で改修しなければならないし、同じ改修するなら、棚田にしてしまったほうが耕地になるし、一石二鳥だというわけです。谷崎さんの話しですと普通は山から出てきた転石を棚田の石垣に使うそうです。そうしますと、転石があらわになり地山の土が柔らかくなって加工しやすくなる「地滑り」はむしろ、棚田の形成に積極的な役割を果たしていたのではないかと思います。

【コンクリートなら安全か】

檜原の美しい石垣の棚田に、一部コンクリートの間知石積み部分がありました。親自然景観にみにくく貼られた「サロンパス」で、景観上好ましくないのはもちろんですが、構造的にも

果たして優れているのかどうか。コンクリートで裏ごめされ、横方向に剛性のある間知石積みは、それ自体は剛でしっかりしたものでしょうが、棚田自体が動く事を前提に考えた場合、横方向に剛であるのは長期的に見ればかえって不利ではないかと思いました。しばらくはその形状のまま保ってくれるでしょうが、棚田の変形がある程度まで来ると一度に倒壊する危険があるのではないかと思います。倒壊した場合そのコンクリートの間知石はもう一度使えるのかどうか。石積みであれば地滑りが起こる個所だけの変形し、危険個所が早期発見でき、その部分だけを手作業で改修する事が可能です。「コンクリートだから安全」という考えは根本から見直すべきだと思います。そして「安全」という概念自体もです。

【「安全」の恐ろしさ】

災害は多くの人命や財産を奪う忌まわしいも

のですが、古来自然災害と人間とは様々な形で深い付き合いがあったと思います。吉野川沿いに発達した藍についても、吉野川が氾濫して肥沃な土が上流から流されてくる事により育ってきたものであって、むしろ川の氾濫が期待されていたともいえるのです。床上浸水など日常茶飯事であったという時代はそんなに昔の事ではないのです。今吉野川の第十に可動堰が計画されています。巨大な構築物で景観的にも地勢的にも好ましくなく、もちろん動植物を含めた自然環境にも好ましくはありません。果してこの可動堰によって得られる「安全」とはどのようなものなのでしょうか。その「安全」には、全てのものを「便利」で「快適」にしていき、やがて人間をひ弱なものにしてしまう物質文明の恐ろしさが潜んでいないでしょうか。

主体と環境が応答するデザインを求めて

建設材料試験所 澤田俊明

■空間デザインにおける環境と人間の相互性

空間に触れる場合、その利用者は、意識せず空間の持つ総合的な情報を得る。今、空間利用者として、生物の一員である人間を対象とすれば、人間は空間情報の直接的な視覚情報だけでなく、瞬時に過去の経験・五感・イメージを働かせながら、本人が意識しようが意識すまいが空間を把握する。そして、この空間把握という作業に対して、利用者である人間は、苦痛は感じない。人間にとって、これは生活する上で当たり前のことにすぎない。

空間デザインについて考える場合、空間の利用者にとってこの当たり前のことが、建築家・ランドスケープアーキテクト・都市デザイナー・研究者などの専門家にとっては、これがなかなかやっかいなものとなっている。私は、20世紀は一言で言えば、良くも悪しくも細分化の時代であったと考えている。空間デザイン把握も、つい最近までは、この20世紀の特徴である細分化の様相を呈していた。空間把握を、空間を把握するものが理解しやすいように単純にモデル化して考えていくというアプローチである。つまり、空間デザインを空間の実体と利用者との

別々に分けて把握するというもので、このうち、空間の実体論的な把握に主眼を置いたものがこれまでの空間デザインに関する知見として比較的多く示されてきた。

空間と人間の関係を考えるということは、次元を上げて考えれば、環境と生物の関係を考えるということに他ならない。環境と生物の関係は、その方法論の取り方により、環境と生物を個別に捕らえようとする二元論的思考と、環境と生物を一体として捕らえようとする一元論的思考が存在する。生物学者としての今西錦司は、環境を「環境とはそこで生物が生活する世界であり、生活の場である」と定義し、環境と生物の関わりについて「生物と環境とが別々の存在ではなくて、もとは一つのものから分化発展した」「生物と環境との交互作用によって成り立った体系」に属しているとして、環境と生物の交互作用による一元的な関係を強調している。この本質的に、環境と生物との一元的な関係の認識から今西は、環境の側に立って生物を解釈する際の注意点として「環境が生物の全ての行動を決定するもののごとく解したならば、この解釈は明らかに間違いであるといわねばならない」

ことを指摘し、環境と生物を個別に認識する二元論的思考の危険性を警鐘している。

■そしてアフォーダンス

環境と人間を一元的に把握する重要な概念としてギブソンが示したアフォーダンスの概念がある。アフォーダンスとはギブソンの造語である。このアフォーダンスの概念は、ギブソンの1966年の著書『知覚系として捉えられる諸感覚』(The Senses Considered as Perceptual Systems)で初めて導入されたもので、その後1979年の著書『生態学的視覚論』(The Ecological Approach to Visual Perception)で詳しく紹介されている。ギブソンによれば、アフォーダンスとは「環境が動物に提供するもの、良いものであれ、悪いものであれ、用意したり備えたりするもの」「プラスやマイナスのアフォーダンス、これらはすべて、観察者との関係において決まる対象の特性であって、観察者の経験の特性ではない」として説明されている。日本でのアフォーダンス研究者である佐々木正人は、アフォーダンスを環境が動物に提供する「価値」と定義している。日本では、このアフォーダンスに関わる研究は、1980年代の終わりにコンピュータ関連の分野でアフォーダンスを応用した研究が進められ、その後、1990年代に入り建築・電気・機械分野に波及していった。そして、1990年代中頃から人間工学・心理学等の分野における基礎的なアフォーダンスの研究が進展し、土木の分野でもアフォーダンスを導入した研究が進んでいる。

佐々木は、次のような例をあげて、環境と生物のかかわりであるアフォーダンスについてわかりやすく説明している。今、目の前に小さな木の橋があるとする。体重の軽い人がその橋を見ると、渡ることでできる橋として認識される。一方で、体重の重い人がその橋を見ると、渡れないかもしれない橋として認識される。つまり、同じ橋(環境)であっても、利用者(主体)にとっては異なった意味(価値)として認識されているのである。その一方で、アフォーダンスには不変なものも存在することがわかってきている。例えば、「手や膝をつかずに登れる壁の高さ」が知覚者の股下の0.88倍であることや、「またぎ行為」と「くぐり行為」の知覚的境界が知覚者の足の長さの1.07倍といった、人間である限り変わることのない環境との関わり、つまり「不変項」である。

一度行けばもう一度行って見たくなる場所、二度行けば三度行きたくなるような場所、このような空間をデザインしてみたいと常日頃考えている。そして、ここには人間である限り良い空間と認識する「空間に対する人間の不変項」が存在するはずである。そのときに、どうしてもアフォーダンスの概念にお世話にならなければならぬだろうと考えている。

都合により、「徳島の近況」は澤田氏の報告に変えさせていただきました。

「棚田と環境」で討論

上勝でフォーラム

安易な工事に警鐘も

田園と都市と地域とのかかわりについて考え地域環境向上の方策を探るフォーラム「棚田の景とアフォーダンス」(都市環境デザイン会議など主催)が三十日、勝浦郡上勝町福原の町ふれあいセンターで開かれた。勝浦川の環境保全を指す住民グループ「勝浦川流域ネットワーク」(田中由宇子代表)、「上勝町棚田を考える会」(谷崎勝祥会長)のメンバーや地域住民ら五十人が参加。

同町生実や旭の棚田を見学した後、同センターで東京農業大の千賀裕太郎教授が「ランドワークと農村景観」と題して基調講演。「ランドワークとは、行政まかせではなく、住民・企業・行政の三者が協力して専門組織をつくり地域環境改善を目指すもの」と説明。滋賀県甲良町の住民参加型の公共工事が成功した例を示して「住民参加型の課題は合意づくり。よりよい合意をもたらすために専門家の役割が重要」と締めくくった。

続いて棚田を考える会の谷崎会長が棚田と周辺環境のかかわりについて説明。「棚田の石積みをコンクリートにすれば崩れることはないが、石のすき間に住むヘビがいなくなることで地域の生態系が壊れるなど悪影響が出る」と、棚田の価値を強調して安易な環境改変に警鐘を鳴らした。自由討論では「自然との共生を子供に教えるために、田園での農業体験を学校教育で義務づけてはどうか」などの意見が出された。